

Ⅱ 特別連載Ⅱ

科学技術  
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

岡山県立大学からの報告



伊藤 照明  
(岡山県立大学  
情報工学部教授)

ハノーバー応用科学芸術大から招き

日独シンポジウム・WS等 実施

今年2月13日から19日、科学技術振興機構（JST）「さくらサイエンスプログラム」の支援によりドイツのハノーバー応用科学芸術大学（HSH）からルディガー・クツナー教授、Ph.Dの研究者1名、大学院生6名、学部学生3名の計11名を招へいし、研究シンポジウム、学生ワークショップ、企業見学、文化体験および人材交流を行いました。

本プログラムの実施にあたり、本学情報工学科とHSH第1、第2学部との連携による実行委員会を組織し、コロナ禍のためオンラインで行った2021年度プログラムに続く2回目の対面プログラムとして計画・実施しています。なお、引率教員のホッホシュルテ教授が急病のため、クツナー教授が引率教員として来日しました。ホッホシュルテ教授にはオンラインでプログラム実施中随時連携し、プログラムの成功に多大な貢献を頂きました。

2日目：歓迎会・ワークショップ

HSHからの招へい者11名は2月12日早朝にドイツのハノーバーを出発し、2月13日、岡山に到着しました。翌日午前中は、本学学生の企画で、茶道部・箏曲部による琴の演奏と紹介、茶道部のたてたお茶を味わうオープニングセッションを行いました。

午後は、本学の沖陽子学長表敬訪問後、本学学生とHSH学生で構成する5つの混成グループに班分けを行い、各グループで話し合つて場所を選択し、グループ内の本学学生のガイドによる散策をとおして日本のことを学び、双方の学生が日本とドイツの違いを理解する学生ワークショップ第1セッションを実施し、活発な交流を行いました。本学学生の英語力は十分とは言えませんが、お互いに相手のことを理解する努力を行った結果、

プログラムスケジュール	
1日目	入国、岡山着
2日目	歓迎会、オリエンテーション 学生ワークショップその1 (岡山市内でのフィールドワーク)
3日目	OHJG2023日独シンポジウム (情報工学部との合同企画による 研究交流シンポジウム)
4日目	学生ワークショップその2 (独とのハイブリッド運営による デザイン・ワークショップ)
5日目	企業訪問 (トスコ、システムエンタープライズ、 アイネットシステムへの企業訪問)
6日目	文化交流・体験 (美観地区、岡山城見学を通じた異文化間交流、 備前焼体験)
7日目	岡山発、帰国

効果的なアイスブレイキングとなりました。この日の交流内容をまとめたビデオプレゼンテーション資料（4日目用）の作成が宿題となりました。

3日目：シンポジウム

本プログラム実施前に設置した本学とHSHの教員で構成される実行委員会による共同開催企画として、第2回日独シンポジウム「OHJG2023」を開催しました。

シンポジウムは、特別講演1件、および一般講演としてHSHから8名、本学から6名の研究者と学生が登壇して研究発表を行いました。このシンポジウムはハイブリッド形式として実施し、本学関係者およびHSHからの参加を交えて、活発な質疑応答が行われました。

4日目：ワークショップ

ワークショップ第1セッションのまとめとして、各グループが宿題として作成したビデオによるプレゼンテーションを行った後、ワークショップ第2セッションを実施しました。ドイツから10名、本学から7名の学生が参加し、将来のスマート社会を見据えた新しい技術のアイデア出しを2日目に班分けされた5班でのグループワークによって行い、英語によるマーケットプレイスプレゼンテーションを行いました。これらのワークショップはハイブリッド形式として実施し、本学関係者およびHSHからの参加を交えて、活発な質疑応



日独の研究交流シンポジウム



文化体験 (備前焼体験)

員が今年は引率  
教員を予定する  
など、H s Hと  
本学との間には  
強力なチームワ  
ークが生まれて  
います。こうし  
たチームワーク  
によって今年度  
の実施計画への  
取り組みはもと  
より、今後の継  
続的な交流が期  
待されています。

答が行われました。

### 5日目：企業訪問

岡山県を代表する3社を企業訪問しました。企業と業務紹介を英語で行った後、和やかな雰囲気で行われた質疑応答を通じて日本企業への雰囲気を感じとっていました。

### 6日目：文化体験

本学学生との合同企画で、倉敷美観地区散策、自家製蕎麦の試食、備前焼体験、岡山城見学を行いました。日本の歴史ある名城である岡山城と、そこで体験した備前焼では日本文化を十分に楽しんでいました。

### ●プログラム成果と教育効果

今回のプログラムでは本学とH s Hの委員から構成した実行委員会で事前に議論し、双方の大学の参加者にとって有意義な内容となることを目標として協働で企画しました。こうした実行委員会による活動が今回の成果に結びついていると思います。

学生ワークショップは、事前に準備したSociety5.0,Industry4.0に関連したテーマを各チームが選び、新しいアイデアを提案することを目標としました。学生同士が疑問点を議論し解決しながら理解を深める方式としたことで、日本とドイツの文化の違いを学ぶアクティブラーニングを実践することができま

### ●今後の展望

採択1回目はコロナ感染症のためオンライン対応となりましたが、2回目の2022年も状況は悪く、予定した夏の実施を取りやめざるを得ませんでした。そこで諦めずに、H s Hスタッフとの議論を重ねた結果、6カ月後に時期をずらすことで対面でのプログラムを実施する対応としました。

来日したH s H参加学生からはプログラムに対する満足感と高い評価の感想を聞くことができ、また本学の参加者からも有意義な交流になったことに対する満足感を共有することができました。現在、3回目となる2023年度の実施にむけて実行委員会を組織し、交流計画や新しい企画についての議論を始めています。前年度来日できなかったH s H教

した。

2月19日の帰国便が悪天候のため遅延し、帰国スケジュールが大幅に遅れるというアクシデントもありましたが、航空会社の真摯な対応があり、全体をおして招へい者全員が感謝と充実のコメントを送ってきました。最後に、研究、教育と国際交流が結びついた本プログラムを実施するにあたり、多大なご支援を頂くとともに、交流のきっかけを与えて頂いた「さくらサイエンスプログラム」、訪問先企業の皆様、そしてプログラムの実施にご協力をいただいた両大学の教職員の方々に深く感謝いたします。

なりました。

学术交流として実施した日独シンポジウムでは、本学大学院生が英語で研究発表と議論を行う機会となり、研究のモチベーションを上げるきっかけ作りとなったようです。また、講演論文集はオープンアクセスジャーナル (<https://doi.org/10.25968/opus-2459>) として公開することができたことも大きな成果となりました。